

うか御免下さいませ...と、自分が突き當つたのではありませぬが、相手が酔いどれ武士だから、恐るゝ。甲「ナ、何んだ此奴、人の武士は目に角立て、グイと睨め付け、我々兩人に突見りやア乞食と見違へる様な風体でありながら、我々兩人に突當るとは太い奴だ、勘辨ならん夫れへ直れツ。若「イエ、滅相もお武家様、私しは御覽の通り、一人の盲目の親を脊負つて居りますゆへ、ツイ其の粗相をいたしました、何うぞ御許しなさらぬ...」乙「イヤ成らんぞツ、爾体我々を何んと心得る、天下の旗本を知らないか、斯く群集の中で殊更ら我々兩人に突き當つたのは、何か意趣意恨でもあるのであらう、左もなば懷裡の紙入れをスリ取る積りに違ひない、サア何うだ白状しろ...」若「親、左様な難題を仰しやつては困ります、私しは父様の眼病を癒したい爲め、毎日観音様へ参詣をして居るのでございます」と、果

ては父親を脊中より降し、大地へ手を支いて詫をする、情けを知らぬ二人の武士はイツカナ聞かばこそ、武「黙れツ、他迄も勘辨ならん、其の方を真二ツにいたすのだツ」と、踏跟つきながら、一刀の柄を握つて詰め寄せる、スルト件の若者は何に思ひけん、ムクムクと立ち上り、父を背後へ庇つて、今迄とは打つて替り、若「ヤイ酔いどれッ、最う謝罪らんぞツ、全体貴様の方が突き當つたのだから、當然なら此方で文句を云ふ筈だが、酔つて居るから我慢をして詫をすりやア付け上り、勘辨ならぬの承知しねエのと、何を愚圖く吐すのだ、今でこそ貧乏はして居るが、乃公も以前は武士だぞツ、孝行源吉と云やア誰でも知つて居るのだ、サア斬るなと突くなど何うとも勝手にしろ、彼のは、怪しからん事が云ふ奴だツ、いよ、若「以て勘辨相成らぬ、若「エ、イ、何を云つて居やアがるんだ、若し阿父さん、心

配せず其處に待つて居て下さいませ、斯んな奴がある私等  
ばかりではない、下々のものが迷惑しますから、一ツ回まして  
置きませう、父オ、源吉や、怪我をしてくれるなよ、若ナアニ  
大丈夫です、サア武士来いッ、と、件若者は大手を擴げて立  
ち開張つた、イヤ二人の武士は怒るまい事か、ズラリ、と一  
刀抜き放ち、武ソレ、遣つて仕舞へい、と、左より切り込ん  
だ、若者はヒラリ、と身を躲して居りましたが、今しもバツ  
と一人の足許へ飛び込んた、思つたら、兩足掴んでヤツと引き  
倒した其の早さ、武士は仰向け様に頭顱と打つ倒れた、残り  
一人は眞甲正面より切り掛つて來る奴を、之れも二度三度空を  
打たせ、横合より鬚を掴んで引き倒し、到頭二人ながら其の場  
へ押へ付け、横合より鬚を掴んで引き倒し、到頭二人ながら其の場  
殿命の付けて居る、奴だ、之れでもか、と、ポカリ、と頭を

痛い、と云ふ約束をしろ、武イヤ、最う断じて爲ない、悪かつた  
せん、と云ふ約束をしろ、武イヤ、最う断じて爲ない、悪かつた  
し、若サア、早くお歸りなさい、と、若者は二人の武士を引  
つ掛つては迷惑をするものが深山あります、と、深切にも脊中  
の砂なぞを拂つてやる、二人の武士は面目なしと思ひけん、  
コソ、と立ち去つた、若者は後見送つて莞爾と笑ひ、若サア  
阿父さん、最う片付きました、之れからお詣りいたしませう、  
父オ、源吉、巧く遣つたか、若ナアニ、彼んな者の二人や三人  
は何でもありませぬ、と、云ひつ、父を脊負つて、雷門を這  
入らんとする、先刻より肥つと此の体見て居りましたる山鹿甚  
五左衛門は、大いに若者の振舞いを感心なし、甚アイヤ、夫れ  
なる若者、一寸待つてくれ、若ヘエ、何か御用でございますか  
甚如何にも、用がある、其の方は身装に似合はぬ天晴な氣象だ

最初は詫をして後で遣つ付ける處は感心だ、失禮ではあるが見  
受ける處、随分貧苦の暮しと存する、些少なれども之れは乃公  
の寸志であるから、納めて呉れいと云ひつ、懐中より金子  
十兩を取り出して突き出すと、若者源吉は見向きもやらず  
イヤ、折角でございませうが、夫れは受ける譯に参りません  
何故だ、乃公の寸志である……源ハ、ハ、ハ、ハ、立派なお武士の様  
だが、大分何うかして在らつしやると見へる、深編笠を被つた  
儘で名前も云はず、貴公に大枚のお金を頂く理由がありません  
夫れとも一文二文の袖の下を願つて居る私なら喜ばしませ  
うが、未だ貧乏はして公食ではありませんよ、斯う見へても  
阿父さんは元は槍一筋の立派な素性、浪人をして目が潰れた  
爲め、斯んな見苦しい装になつたのです、一日や二日食はんか  
と譯の判らん金を貸ふのは嫌いです」と、云ひ捨て、ス  
クと境内へ這つて仕舞つた、流石の山鹿甚五左衛門義矩も

余りの事に茫然と立ち竦んで居りますと云ふ、此の若者こそは  
後に布施源兵衛義矩と名乗り、山鹿甚五左衛門の片腕と相成る  
人物でございませうが、ソハ後編のお物語りといいたし、本編は  
例に依つて既に紙數の限りと相成りましたるに付き、一先づ此  
の邊にて預かり置き、不日後編を「布施源十郎」と題し、  
大石内蔵之助義雄を始め、四十七士の乗り出し、再び山鹿甚五  
左衛門義矩が播洲赤穂に行きて、山鹿流の軍學兵法を教授に及  
ぶといふ、至極面白處を御清聴に達しますれば、何うか出版  
の際は前編と同様、相變らす御愛讀の程を今より願つて置きます  
へエ、嘸御退屈……

山鹿流 陣太鼓  
山鹿甚五左衛門 終

大阪講談小說出版協會

發行圖書

大賣所

島の内同風館  
 岡本増進館  
 名倉昭文館  
 此川欽成堂  
 中川玉成堂  
 此川玉成堂  
 松岡博積  
 本木多原  
 金俣成善  
 唯繁象文  
 堂館堂館  
 殿極井矢立  
 口上島川  
 々隆一誠文  
 文書進明  
 堂館堂堂

著作權所有

發行所

駸々堂

電話 千〇〇七番  
 大阪市心齋橋北詰八十六番邸

明治四十四年十月一日印刷  
 明治四十四年十月五日發行

山鹿甚五左衛門

講演者 玉田玉秀齋

發行者 大淵浪

印刷者 山田元吉

大阪市心齋橋北詰八十六番邸

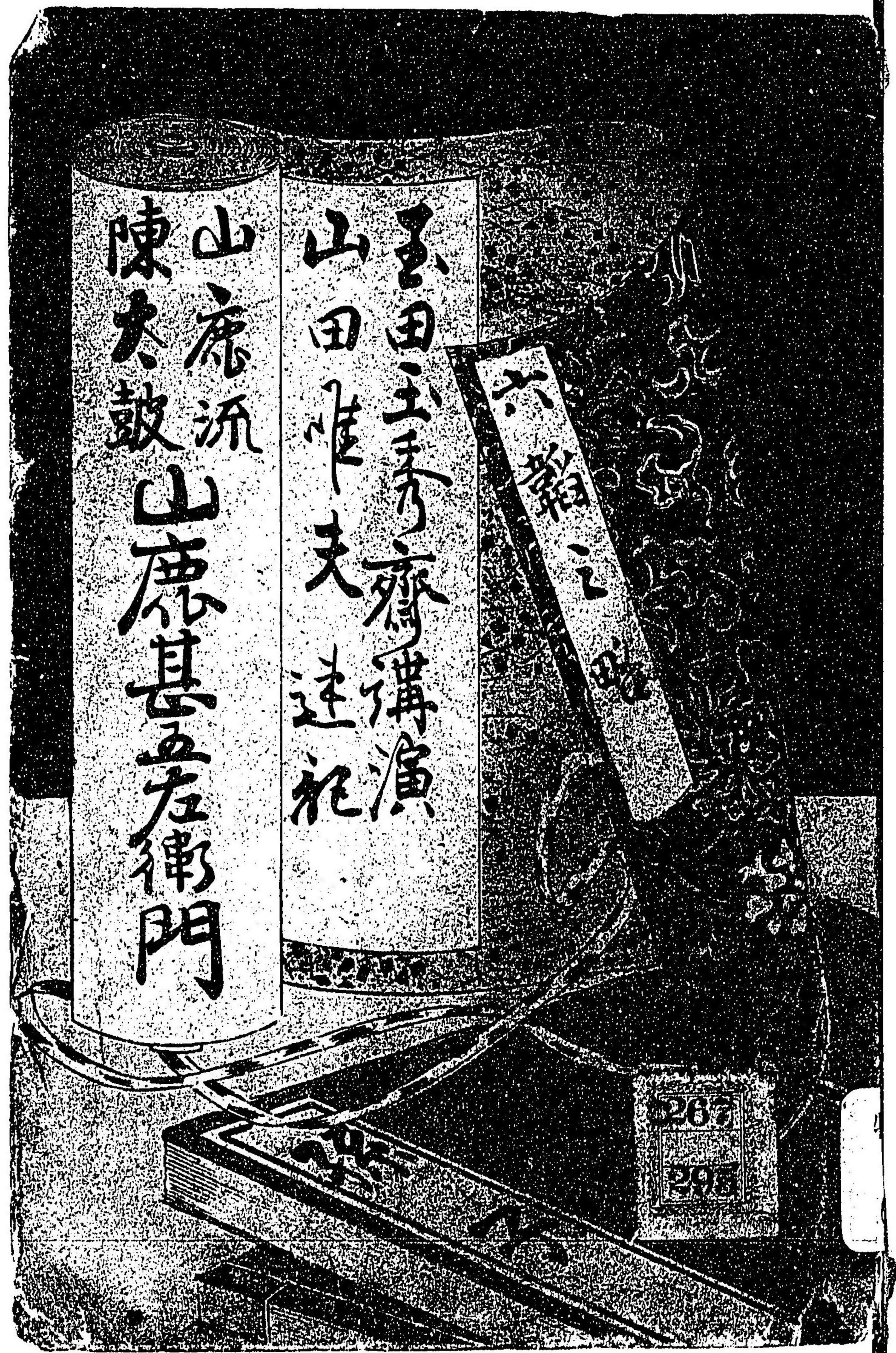






駿  
下  
堂  
發  
行





097782-000-0

特9-613

山鹿甚五左衛門(山鹿流陣太鼓)

玉田 玉秀齋/講演

M44

DBS-1721

